

1 次元

「祈りの効果を実証しながらエビデンスを積み上げた上で信じるに至る」(カズヨさんの言葉)というのは近代にはじまる実証主義的かつ強力な態度です。この態度は思考の延長によって認識を拡大していきます。最初の態度を保持したままですから、知識は増えていくのですが、知識を支える在り方が変わっていませんから、他方では越えられない認知の壁をもっています。近代科学はその壁に遭遇しています(たとえば量子力学)。したがって、どこかで「信じるに至る」跳躍が必要となるにしても、エビデンスの積み重ねは壁をゆるやかな坂に変えてくれそうです。

宗教はそうした壁を越えるために、体験や信を用いてきました。そうして得られるもっとも核心的な真理は、不立文字として、思考によるアクセスを阻んでいます。したがって、わかる人はわかるし、わからない人はわからない、ということになります。

科学は、「実証しながらエビデンスを積み上げ」、物質の真理を究明してまいりました。その結果、この宇宙は高次元であること(図1)、さまざまな波動によって構成されていること、そしてその構造がだんだん明らかにされてきました。波動はひろがりをもって、見るものと見られるものの区別を取り去っていきこうとしています。つまり、(無意識を含めて)意識が宇宙であり、宇宙が意識であるという理解にあと一步のところまできています。

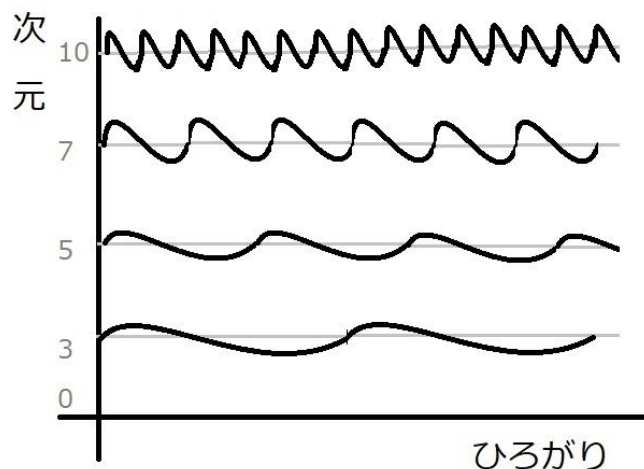


図1 宇宙の空間次元とその次元を規定する波動

これは何を意味しているかという、思考が宇宙を構成しているということです。宇宙は多くの波動として周波数をもっていますから、思考の周波数や指向性によって宇宙のどの部分に影響を与えるのかがきまります。確かに、自分ではこの宇宙をこのように創った覚えはありません。むしろ、人生まならないと思っている人が多いぐらいです。顕在意識としてはそうかもしれませんが、潜在意識ではどう考えているかわからないわけです。潜在意識というと潜在していてわかりえない、とされていましたが、それもだんだん明らかになってきました。一部の学者によって、始原的な意識において、時空を構成するハタラクが主張されています。

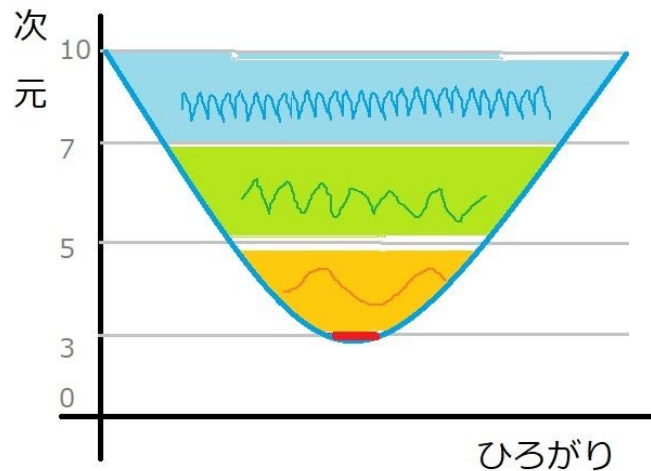


図2 3次元に現れているものとそれを支える高次元の波動のひろがり

波動が重なると安定した塊に見えます。ちょうど大きな津波は小さな波が凝集して安定しているようになっているのです。様々な波動が交叉したところに塊ができます。塊は各次元で観察できますが、粗い塊は(粗い波の)低い次元でのみ観察されるようになります。図2では下の次元にいくほど広がりが小さくなって波が粗くなって見えています。図ではそれを鍾乳洞で垂れ下がる氷柱石のような形で表しています。3次元では波動の塊はモノや肉体に見えています(赤の部分)。高次元でも凝集していますが物質界よりも細かい波動のものです。こうした波動の塊は基礎となる細かい空間的波動と時間的波動の混成によって構成されています。図2を下から見ると、肉体のまわりに多くの階層が同心円状に広がって見えるはずですが、それが、オーラとなって、肉体・幽体・霊体・神体、、、といったボディを形成しています(禅の通底とは3次元の底が抜けて0次元に至ることです)。それを取り巻く世界が物質界・幽界・霊界・神界、、、です。

2. 祈り

以上のことをふまえて祈りを定義すれば、「祈りは顕在意識とする高次元思考」です。しかし、この定義は一見矛盾しています。通常の人間の顕在意識はそのまま高次元思考ではないからです。顕在意識では、腹が減ったとか誰が嫌いとかいう思考をしている通俗的思考をイメージします。当然のことながら、高次元思考は高次元でなされるのですが、それが顕在意識とダイレクトにつながっているのが本来の祈りです。そういう意味では通俗的思考である願望は祈りではありません。祈っている時は、顕在意識が高次元意識に昇華しているのです。したがって、祈っている主体は高次元意識(内在神ともいえる)のほうです。

「祈りは顕在意識とする高次元思考である」とすると、言葉である必要はありません。思考、印、スポーツ、舞踏、絵画、音楽、歩くこと、なんでもいいのです。そこに高次元の波動が響けばいいわけです。高次元の波動ほどエネルギー的に大きく、エネルギーであるために物理的に作用しない、ということがないのです(エネルギーは周波数に比例します)。比喩的にいうと、バッハを演奏しているのと、ロックを演奏しているときとは異なる響きと作用がそこに実現します。響きのなかで高次元の周波数の波動をひびかせているとしたら祈りということになります。そのチャンネルとなるものと祈る(演奏する)人の力量によって祈りの周波数が決まります。チャンネルによって図2でいうところのどの次元に共鳴するかが決まるということです。チャンネルとは音楽の例では選曲であり、言葉にする祈りほどの祈り言葉を選ぶかということになります。それによってエネルギーとその作用は決まるのですが、音楽の演奏のように本人の力量も決定要因になります。

そこで、個人の力量に依存しないチャンネルがあると便利です。老若男女を問わず誰でも、喜怒哀楽どんな時でも、その祈り言葉を唱えればチャンネルが合って、高次元波動がそこに響き渡るようになっている。それらは祈りの中でも特別で、約束された言葉です。キリスト教の主の祈り、般若心経のギャーテーギャーテー・・・、神道の神名による祝詞、南無阿弥陀仏、世界人類が平和でありますように、密教の真言、などは高次元波動(神界)とつながります。ですから、これらを祈っている時は本人の自覚のあるなしにかかわらず、誰でも神のひびきと一つになっています。口ずさんでいるうちに神のひびきに浸りきっていくようになります。法然はそれをねらって、複雑なことを一切省いて、南無阿弥陀仏だけに集中させました。

ひたすらに祈り祈りて祈るなり 祈りの泉湧きいづるまで(斎藤秀雄)

親鸞はさらに一步すすめて、一念の念仏の信だけに放下させたのでした。一切を一念の念仏に委ねる信によって決定(けつじょう)させたのです。

念仏には無義をもって義とす(歎異抄)

阿弥陀仏の念仏は、自力のはからいを離れています。高次元にチャンネルが合ったならば、自分のはからいを離れて、目的も意味も忘れて、ただ祈るだけです。祈るのは肉体の自分ではありません。高次元の意識です。そのとき、祈りが祈っているといえます。

3. 祈りと時間性

図1と2は空間次元を縦軸にとっていて、時間については省略していました。ここでは時間性も考慮して祈りについて考えてみましょう。究極的には時間は無いのです。時間は3次元をはじめとする空間に付随していて、時空を構成しています。時間とはエネルギーによって方向づけられたフロー(流れ)のようなものです。こうして生きているということは、自然と時間を経験しますが、時を推進させるエネルギーでもあるのです。

時間(エネルギーのフロー)がたつという経験はエネルギーの経験であり、それが生きていること、生命でもあったのです。ゆっくり沈む太陽をみているとき、ドリップから珈琲がポタポタと落ちるとき、・・・そこにも、波動の周波数は関わっています。エネルギーの波動の周波数が粗いと観察は飛び飛びになり、細かいと十全に味わう時間となります。かつて名選手がボールが止まって見えたと言ったのは後者の観察です。

高次元になるほど波動が細くなるので、時間が止まり、ついには無くなっていきます。また高次元、空間10次元以上は時間が多次元化していきます(ここからが神界です)。つまり、自由に体験を選び、因果律を超えていくこととなります。ここで、因果律を超えると、原因と結果が一つになっていくことを意味します。たとえば、東京に行きたいと思ったらすでに東京にいるような感じです。因果律を超えた時間性にまで波動をあげることはこの3次元物質世界では集合意識による影響から難しいのですが、原理的には可能です。実際に奇跡をなした人たちがいたとしたら、これで説明ができます。また、誰もごく部分的に、思ったことがすぐに実現するような”偶然”を経験することはあります。

さて、祈りとこの時間性は深く関わっています。「・・・であってほしい」という願望は、今はそうではないけれども、未来にそうなってほしいという期待です。つまり、因果律のなかでの思考です。高次元の祈りは、原因と結果が一つになっていくので、「・・・である」という思考です。この「・・・である」あるい

は「・・・となった」という思考は、高次元では現実として同時に実現するのですが、この3次元物質世界の場合は時間を要します。

そういう意味では、祈りが「・・・でありますように」というよりも「・・・である」のほうが、祈りの本質としては合致しているといえます。しかし、3次元物質世界は時間を必要とする場合が多いので、そのタイムラグによって「・・・である」という言明と未だそうになっていない目の事実との不一致に人は戸惑ったり、エビデンスを必要としたりします。それをやせ我慢してやるよりは「・・・でありますように」「・・・給え」とするということもあります。

この宇宙が創造されたとき、思考と創造活動は同時に果たされていました。聖書には、「光あれ」とか神の思考がそのまま現実化していく様子が記されています。祈りが高次元の思考であるかぎり、思考と現実のギャップが小さくなっていくはずで

4. 祈りと神

ここまで祈りの物理的な側面についてみてまいりました。ほとんどの祈りは神様や仏様に向けてなされますから、そうした超越者と祈りの関係について書いてみたいとおもいます。まずそうした超越者について明らかにしてまいりましょう。

図2は一人の人間を次元的に輪切りにした図とみることができます。どんな人間であっても、高次元の波動における心身は神そのものです。その意味では神とは本来の人間のことで

神は本来の人間であることに加えて、外部にもいます(波動として凝集しています)。それは物質体、幽体、霊体をもたない神体のみの波動です(図3)。エネルギーであるために時間を経験する存在であるのは人間と同じなのですが、体験する時間の質は全く異なります。

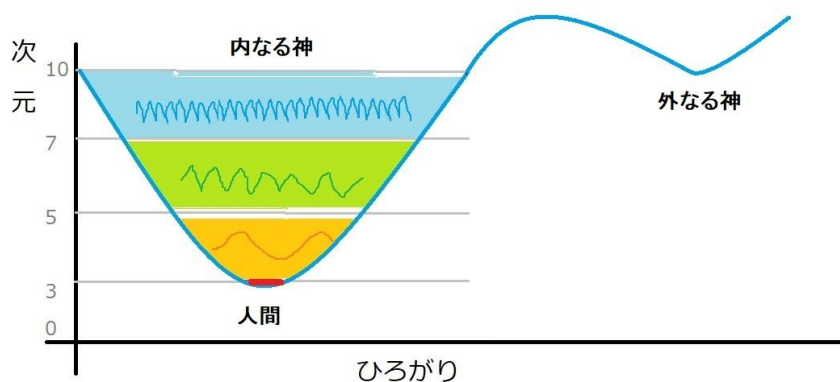


図3 神と人間

本来の人間としての内在する神と外なる神は、その上位の次元において一つです。他者も同様です。氷柱石のように別れているのですが、その根を見ると一つにつながっています。一つになるほど次元は上昇し、波動は細かくなり、エネルギーは高まります。その意味で、祈りは再統合であると言

えるのです。奥義(ウパニシャッド)とは、内在神(アートマン)と外在神(ブラフマン)の統一です。禅は内在神を見出し、キリスト教は天にまします外在神を仰ぎます。その統合が祈りの奥義です。

ほどけが、ほどけを、をがむこと
なむがあみだに、をがまれて
あみだがあみだに、をがまれて
これが、帰命の、なむあみだぶつ

(浅原才市)

これは仮名文字しかかけない下駄職人の詩で、内在する仏と外なる阿弥陀如来の一体感をあらわしています。ここまで理屈をたくさん書いてまいりましたが、そんなものが消し飛んでしまうような素晴らしい才市の境地です。そして自分自身が祈りのエビデンスそのものになっているのです。自我観というものが無くなっていくほどに祈りの効用というものが感じられます。自我が無くなる(色即是空)だけではなく、そこから自然法爾のハタラキが現れてきます(空即是色)。救われるべき「わたし」がいなくなったとき救われて(往相)、自分自身が多くの人の救いの縁となります(還相)。ですから、自我を掴まなくなるという祈りの功德はまず自らにあります。

おわりに

今日、地球規模の変革がはじまっております。環境の変化もさることながら、意識変化がその核心です。『神との対話 完結編』につぎのように書かれています。

人類を目覚めさせようという招待を受け容れれば、あなたがたは「自己」を変えることができる。最初にわたしが言ったとおり、自己を目覚めさせる最速の方法は他者を目覚めさせることだからね。そこに焦点を絞れば、あなたがたは自分がすでに目覚めていることに気づくだろう—そして、すべてが一変するだろう。(p.50)

さまざまな世界問題に背を向けてひたすら個人の修行によって真理を明らかにしてから、人々を救済するのもよし、また個人と人類の救済を同時に果たす、修行と貢献を同時にしていく道もまたよしです。世界人類の平和を祈る易行道を通してそれが叶うと確信しております。「祈りの効果を実証しながらエビデンスを積み上げた上で信じるに至る」ことによって、生活のなかの祈りから祈りのなかの生活へとつづく道です。

己が幸願う想いも朝夕の世界平和の祈り言のなか (五井昌久)